

新
刊
紹
介

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

新島襄生誕一五〇年記念論集

『新島 襄』

——近代日本の先覚者——

(晃洋書房・発行一九九三年十二月
A5判・三二七頁 三、四〇〇円)

本書は新島襄生誕一五〇年記念論集として編まれた。執筆担当者は二一名にのぼる。それぞれの研究分野は異なるが、いずれも心の中に新島襄を温めている人であり、豪華な陣容である。僅かな紙面では個々の論策にまで及び得ないため、総括的又は紹介的になることをお許し頂きたい。

近事において新島研究は「同志社百年史」及び刊行中の「新島襄全集」(全一〇巻)の

企画により、急速に研究視野が開かれたつある。本書はその成果を基礎に、実証的且つ多角的に新島個人のみにでなく、彼の創設した同志社の近代日本への展開と貢献が一貫した編集方針で貫かれている。そのため個人の新島研究では及びえない重要な契機が豊富に見出され、興味が尽きない。

印象的な記述になるが、従来の研究ではあまり触れられてこなかったアメリカの政情や思想的、神学的背景や、アンドーヴァーやアーモスト大学の学園風景や教授陣、教育過程について論及したものが巻頭部分に多く、全体として新島の前に置かれた選択肢の中から、彼が主体的に選びとった信仰、思想の形態が浮き彫りにされてゆく。

同じくアメリカに留学した内村鑑三や新渡戸稲造との対照も興味をひく。この部分はその後の論策を読むための重要な伏線となっている。又新島が岩倉使節団と同行し、欧米の教育事情をリポートしたと目される「理事功程」の作制事情、新島教育思想や説教者としての資質など、語る人を得ている感がある。この点は他の論文も変わらな

いが、やや各論に入つての同志社初期の牧歌的ともいえる学生生活(近代スポーツの濫觴を含めて)、従来やや短少すぎる感の否めなかった女子教育への配慮、東大や早稲田大学への人格主義の移植、福沢諭吉や門下生との交流、又のちの日銀総裁深井英五の悲劇性、医学校創設にむけての新島のビジョンの中に胚胎した京都看護婦学校の顛末、日本近代史上欠かせない自由民権運動家と新島との関わり、同志社卒業生たちの社会福祉分野への「志」と著しい貢献、「出会いの人」新島の書簡集(殊に新取書簡による)の解明、教会形成と地方伝道の幻、京都の近代化事情と同志社英学校、いづれの論文も重く又楽しい。

欲を言えば各執筆者に今少しの紙数があればという思いがするが、全体のまとまりのことを考えれば致し方もあるまい。同志社関係者のみならず、日本近代を考える全ての人にすめたい。

高道 基(中部女子短期大学長)

新島襄生誕一五〇年記念写真集

『新島 襄』

——その時代と生涯——

（学校法人同志社・発行一九九三年二月）
（A四判変形・一八四頁 三、〇〇〇円）

視覚に訴えて新島襄を理解させようとする試みとして、本書はまことに時宜にかなった出版である。これまで発展してきた「新島学」と「新島襄全集」の成果をふまえて綿密に編纂されているので、将来新島に關して、これを凌駕するほどの写真集を出すことはまず不可能ではあるまいか。編集の中心的な働きをされた同志社社史資料室の河野仁昭室長に対し、深い敬意を表すものである。

松山総長による適切な序文「教育と伝道にささげた生涯」が巻頭を飾っている。目次に続き、新島の冒険、アメリカで受けた教育、書簡の人新島、旅の人新島、大磯での永眠をそれぞれ暗示する五枚の芸術的な合成写真が配置されている。一八六四年七月十七日（陽暦）の早朝、アメリカ商船ベurlリン号のつてひそかに脱国していく新

島が眺めたであろう朝焼けの函館の姿は、新島の決意を拔擢する漢詩とあわせて、胸に迫るものがある。そのあとに七つの章にわけて、新島の足跡が紹介されていく。第一章 海外への視野／第二章 ニュー・イングランドでの九年／第三章 同志社英学校の開校／第四章 伝道——その成果と特質／第五章 同志社大学設立運動／第六章 同志社の充実と東北伝道／第七章 一粒の麦 各章ごとの簡にして要をえた説明文は河野さんの筆によるものである。

河野さんは新島の生涯を記述するにあたり、従来のオーソドックスな諸伝記を忠実に踏襲し、ことさらに奇をてらうことをしない。それは、本書ができるだけ写真にスペースを割き、記述はできるだけ簡潔にしようという方針のもとに編まれているためであろう。本書はまた新島の日記・手紙・揮毫・絵画の実物の写真を数多く収録している。日記や手紙については巻末にその解説文がそえられていて、新島の達筆に辟易しがちな読者を助けてくれる。二枚の地図がそえてあり、旅の人であった新島の足跡を辿りやすくしている。きわめてコンパクト

トな「新島襄略年譜」が巻末をしめくくっている。

函館のアレキサンダー・ポーターの写真とか、寺町通りの新島邸の建設費を負担したシアーズの写真などは、とても珍しい。瀕死の新島が英文の遺書を鉛筆で書いた、スイスのサンゴタル峠のホテルの写真しかりである。新島が一八八二年に湯治した山形県米沢の山の中の温泉宿の写真も入っている。カメラマン秋山真邦氏の腕前は見事という外はない。

本書は新島の生誕一五〇年を記念する画期的な出版であり、歴史的なセンスと芸術的なセンスに調和的に支えられた編集であるといえる。本書の出現を大手を上げて歓迎するものである。

北垣宗治（敬和学園大学長）

内田勝敏・清水貞俊編著

『EC経済論』

——欧州統合と世界経済——

（ミネルヴァ書房・発行一九九三年三月）
（A5判・三、五〇〇円）

本書は日本E.C学会の初代理事長である片山謙二先生が主催される、経済学者によるE.C研究会の第3弾目の研究成果である。この研究会は関西の学者を中心としており、E.C研究では日本で最も伝統があり、かつ、権威のある研究会である。本書はその成果として名に恥じない優れた内容になっている。執筆人の中には商学部の内田教授を筆頭に、嶋田助教授をはじめ内田先生の同志社関係の御弟子さんが複数名前をうねっている。

内容は本書の表題通りE.Cを経済的側面から多角的に分析しており、かつ学者、実務家、E.C研究を深めようとする学生等向きのレベルの高い内容となっている。分析手法としては事実を語らせ、その上で理論的にまとめ、問題を提起するという方法をとっている。全体は十二章で構成されており、第八章までがE.Cの内部的発展に関する分析に当てられ、最後の四章がE.Cと途上国、東欧、アメリカ、日本との関係の分析にそれぞれ一章づつ当てられている。各章共それぞれのテーマについての歴史的発展を踏まえ、必要に応じて歴史的背景に触

れつつ分析している。編者のこのような努力により、本書は決して入門書とは云えないレベルのものであるにもかかわらず、大変理解しやすい叙述スタイルになっているし、関心のある章だけを取りだして読んでも面白く、かつ、十分に批判に耐え得る力作が並んでいる。

E.Cは一九九三年の秋か年末に発効すると予想されているマーストリヒト条約によって新しい段階へ飛躍することになるが、その内容についても経済的側面について適切な分析が随所で見られる。同条約を欧州連合条約とすべきか、欧州同盟条約とすべきか研究者の中で論争があるが欧州同盟条約とすべきであるとの観点を第一章ではつきり打ち出している。

E.Cの内側に着目した統合の発展、国際関係の中に於けるE.C発展について総合的に把握できる学問的に極めて良心的な書物である。

金丸輝男（大学法学部教授）

星名 倫・富居 富・横山勝彦共著

『増健の科学』

（三和書房・発行一九九二年三月）
（B5判・一四五頁 一、八〇〇円）

ローマの詩人ユベナリスの著した「風刺詩」に「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」という有名な一節がある。人間だれしも健康を願うが思いどおりにはいかないのが浮世の常である。健康とは与えられるものではなく自ら創り出すものであるという著者達の共有する認識が本書全体に流れる基本理念である。この認識は表題に使われた耳慣れない「増健」という語からも窺えよう。永年にわたり保健体育教育に携わってきた三人の著者の提言だけに、そこには経験に根差した重みを感じられる。

専門書を著すとき、章立て構成は著者のもつとも苦労するところである。ある章を前におくか後におくか、書物から読者が受け取るメッセージはさまざまとなる。スポーツ普及書では、スポーツの効用から説きはじめ、各種トレーニング方法の指導におわるのが普通である。ところが本書は第一章で人間のからだの仕組みを簡単に紹介し

たのち、とくにスポーツ傷害と応急処置について二章を割いている。スポーツ活動には傷害がつきものだが、適切な知識と対策を身につければ、むしろ得るところは大きいという著者のかねてよりの主張が滲み出ている。

スポーツ傷害の発生や対策について理解を求めたのち本書はいよいよ各種トレーニングについて本格的な指導を展開している。本書の特徴は単なる指導書にとどまらず、なぜそのようなトレーニングが人体にとって理に適うのか、年齢に応じて解き明かすところにある。あえて「科学」という語を表題に掲げた著者の目論見はここにある。

スポーツといえは若者の特権、壮年期をすぎればおとなしく観戦して楽しむものという誤解は根強い。本書の対象となる読者は、現にスポーツに興じる若者だけではなく、老いも若きも自己の健康に関心をもち、健康維持にスポーツをというもののすべてである。本書には「健康を維持するための運動をすることができからだをつくる運動」というくだりがある。からだを鍛える

身体運動をスポーツとよぶならば、現代人はスポーツを楽しむには程遠い基礎体力力しかないという現状を著者は真剣に危惧している。

図をふんだんにとり入れ、微に入り細を穿った指導をしているが、やはり「百聞は一見に如かず」の諺どおり、トレーニングや体操にあたっては実地指導にかなうものはない。やはり生涯健康管理の啓発と実技指導は表裏一体のものであろう。

堅苦しい専門書にしたくはないという著者の希望は、随所に散りばめられた「フラグメント」と称される紹介コーナーに読み取れる。脳貧血のへびから高血圧のキリンまで、このコーナーだけを拾い読みする読者がでてこないともかぎらない。

八田英二（大学経済学部教授）

前川道介著

『クラテール叢書』

—— 19世紀ドイツ文化史研究 ——

『楽しいビードーマイヤー』

（国書刊行会・発行一九九三年三月）
A5判・三六八頁 三、四〇〇円

「楽しいビードーマイヤー」はたのしい本である。好きな紅茶をいれてひとり窓辺にくつろぎ、鳥の囀りに耳を傾けながら好きなページを開いてゆつくりと目を遊ばせる。可憐な挿絵、珍しい写真もちりばめられている。用事と呼ばれたら本を閉じてまたゆつたりした時間に恵まれるまで大切にしまっておく。そして次の幸せな機会を待って本を開けば、再びあの心地よい読書の喜びが甦ってくる。

この本の前半には、一八一五年のドイツ解放戦争から一八四八年の三月革命まで、メッテルニヒの反動政策による出版物の検閲、思想の弾圧はあったものの、それ以後の時代に較べればまだ牧歌的だった時代の、ドイツの都市市民の生活のさまざまな姿がテーマごとに描かれている。菓子喫茶、

タバコ、庶民の食卓、ビール、食通、家具、庭園、モード、旅行、ダンディ、玩具、影絵、貸本屋、奇術師、暗殺等々。そしてなんとエロティカも欠けてはいない。

馬ならぬ鹿に曳かせた車を駆ってキャブエに乗りつける一代のダンディ、ビュックラー・ムスカウ侯爵がいるかと思えば（菓子喫茶）、ベルリンのプロレタリア用食堂では木製のスूप注射器が登場し、値段によって目盛を合わせて客の皿にスूपを注ぎ込む。もし客が水のようなスूपに文句を言おうものなら電光石火、例の注射器でスूपを吸い戻してしまう（庶民の食卓）。また有名なブリア・サヴァランに比肩すべき食通オイゲン・フォン・フェルスト男爵の章では抱腹絶倒のオリジナル・レシピにめにかかれる。当時の旅びとが利用せざるをえなかった恐るべき馬車（通称 拷問箱、漬物樽等々）の章を読み、挿絵を眺めれば、私たちは泰西名画に描かれた風景や旅人をおこれ迄と違った感慨をもつてみつめるようになる（旅行）。

後半を占める奇人伝は必ずしもこの時代のドイツに限ることなく、著者の永年の読

書の中で心に残った愛すべき奇人たちの描写にあてられている。私は巻末の「鳩のママさん」を読み、つましい老婆の写真を目にする和不覚にも落涙してしまうのだ。

たのしみつつ読みすすむうちに、しかし私たちはこれらの事柄がどれほど永い年月の、膨大な読書の中から、ちょうど鍾乳石が形造られてゆくように少しずつ拾い上げられたものに気づき肅然とする。自分の心に適うもの、という唯一の規準に従って他に目を逸らすことなく永い歲月を読み重ねてゆくと、何十年か後には他の人の追隨を許さないこんな世界がつくり上げられるのか、という感動である。文章は平易で素朴にみえるが決して真似のできない味わいがある。カパーには写真の代りにビーダーマイヤー時代に愛された影絵の手法で著者の肖像が掲げられているのも微笑ましい。著者の学識と編集者の著者への敬愛がひとつになった本である。

栗原良子（大学法学部嘱託講師）

北尾謙治他著

『はじめてのCAI』

—よりよい英語教育を求めて—

（山口書店・発行一九九二年十一月）
A5判・二四六頁 二九、〇〇〇円

北尾謙治、石原堅司、山内信幸（以上同志社大学 枝澤康代、佐伯林規江、三根浩（以上同志社女子大学）及び他学から参加の吉田晴世、吉田信介の八氏が、同志社大学学術奨励共同研究の一環として研究プロジェクトを組み、「CAI（コンピュータを利用した教育）」と英語教育をテーマにして行った研究成果のまとめの一つとして上梓されたのが本書である。このプロジェクトでは、CAIに関しメンバー各自の持つ研究と体験に基づき、それぞれの専門領域での理論研究と実践を進化させながら、教材開発を追求する研究が継続されたと考えられる。従って、この研究の所産である本書は、CAIに興味と関心のある人々の入門書として、またすでにCAIを実践している人々の研究書としても、格好の内容を提供する書物となっている。

本書は理論編(七章)、実践編(七章)、及び付録のフロッピー・ディスクの三部門によって構成されている。

まず理論編では、欧米と日本のコンピュータを利用した教育の歴史と動向、教師と学習者の両側面からみたCAIの利点と問題点やその限界、学習理論との関係、プログラム学習の理論とその進め方、学習の個別化の意義など、コンピュータを教育にいかにも利用できるかの基本的理論が広い視野から捉えられ、分かり易く解説されている。

さらに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な解説とCAIの将来展望などが附け加えられて理論編を締め括っている。

次に実践編では、理論編で展開された理論的枠組みにそって、日々の英語教育の実践でいかに理論を計画的に具現化したかが、領域別にまとめられている。まず最初に、教育実践の中心的課題であるCAIの教材の作成や選択が総括的に解説されている。次に英語学習のうち、語彙、文法、読解、作文といった領域の指導にCAIがどのように関係するのかの解説と、各筆者の

体験が紹介されている。こうした個別的実践が、組織的に実践された事例として同志社大学におけるCAIを利用した英語教育を取り上げ、その歴史、目的も含め詳細に解説され実践編のまとめとなっている。

最後の本書の第三部にあたる付録フロッピーは、類書に見られない本書の特色である。このフロッピー・ディスクには同志社大学で開発された、プログラム、CAI教材のサンプル、教材一覧、オリエンテーション資料などが含まれている。本書の最終章の「附録の説明」を手引きに、このフロッピーに収められているプログラムを起動させることによって、読者は教師の立場と同時に学習者としての体験をも持つことができる。本書には類書に見られるような、写真や図版が解説補助としてほとんど利用されていないが、このフロッピーは実体験を読者に与えるという点で、図版や写真以上の効果をもたらしている。またこの中に含まれている文献目録は七八〇点にも及び、CAI関係者にとって貴重な研究資料となるであろう。

本書には内容の重複が見られるが、共同

研究の著書としては止むを得ないことであろう。入門者にとっては、かえってこの重複は役に立つと考えられる。本書は共同研究書として全体をバランスよくカバーしているが、言語教育にとって欠かせない聴解力の養成の問題が取り残されているのは残念である。音声メディアや映像メディアとコンピュータを組み合わせた研究や実践はすでに進んでいる。この領域についての今後の研究と実践を期待したい。

言語の学習者が最終的な成就感を味わうのは、個々の学習者が教室という限られた空間をはなれ、それぞれの目ざす場面で、その言語を使用できたと実感する場合である。CAIを通じて、学習者がどのように自己教育力をつけ、それぞれの目ざす言語使用の場面で成就感を味わうのか、また、学習が不成功になるのは、どんな場合か、その理由は何かなど、今後のトータルな追跡的研究が望まれる。

宮本英男(大学文学部教授)

西尾 昭著

『韓国その法と文化』

(啓文社・発行一九九三年一月
A5判・二六六頁・二、九八七円)

ある国の法体系を客観的に、しかもその特質を失うことをよく描き出すことは、大変な難作業である。本書は、その至難の技を見事に達成している。

著者は、「法はその民族が価値ありとして取り入れ維持してきたものすなわち文化の一分野であり、また文化はその民族が歴史という長い時間の中で生成し変化させてきたものですから、その国の法の説明にあたってはその基礎となった文化やそれを育ててきた歴史についても認識する必要がある」と指摘している。この認識が、本書のタイトルを『韓国その法と文化』とさせた理由にちがいないし、その国の文化の重視が本書の内容を厚みのあるものにし、活き活きとしたものになっている。また、文化をとらえることを可能としたのは、著者がなにより韓国という国を知り尽くしていることにある。

さて、本書の構成は、四つの部分から成

っており、パート一は、各時代概観、パート二は、その文化と社会、パート三は、法の変遷、パート四は、大韓民国の法制である。

「各時代の概観」においては、古朝鮮時代から戦後期に至るまで六時代に区分して、その歴史がコンパクトに要領よくまとめられている。つぎに、「その文化と社会」においては、三つのキーワード、すなわち、(一)精神世界を形成した人心の統一に関するものとしての〈儒教および仏教〉、(二)政治の統一機構としての〈律令制〉、(三)思想伝達のための統一手段としての〈漢字〉を核にすえて、縦横に論を展開している。このパートは、まさに本書の圧巻ともいうべき部分であり、「法と文化」の結びつきが実証されている。この三つのキーワードは、西欧文化圏におけるキリスト教、ローマ法、ラテン語に相当すると指摘されているが、よく肯けるところがある。

「法の変遷」においては、部族法期、律令法初期、律令法中期、律令法整備期、西欧法継受期に時代区分し、その特色が論じられ、韓国の法の歴史の把握を助けている。

最後に、「大韓民国の法制」においては、現代の韓国の法体系が紹介され、そのシステムと内容が論じられている。

なお、本書には、著者のねらいを支えるもう一つの特色がある。それは、「付図」として入れられているものであるが、とくに、ハングル表、族譜などは、大変に興味深く、かつ有益なものとなっている。

本書によつて、「韓国法の過去から現代についての概説」を、居ながらにしても学ばせて頂いた。

安枝英訓(大学法学部教授)

飯 清著

『主旋律と裝飾音』

(自費出版・発行一九九三年四月)

飯清氏が「自分史」を上梓された。長く、靈南坂教会主任牧師の任にあつた著者は、改めて紹介する必要もないほど、キリスト教界の内外、そして多くの同志社人の間には、よく知られた人である。あるいは巷間には、芸能関係者の結婚式をはじめ、聖職者のイメージからすれば破格の牧師として迎えら

れているのかもしれない。およそ牧師らしくない牧師、それが多くの人が抱く氏の印象ではないだろうか。今度の「自分史」にしたって、ありがちな牧師の自叙伝とは異質だろう。来し方を振り返りつつ、自己満足のうちに読者を神へと導こうとするような了簡とは無縁である。

氏を慕う多くの人は、自分こそができれば氏を知り悉していると思ひこんでいるふしがある。そういう人はまず、自分の名前を見つけて自分と著者との関係を確認するだろうか。あるいは、知人の名前を見つけて氏との浅からぬ関係に驚く人もいるかもしれない。今治、京都、同志社、海軍、米國、倉敷、東京、それぞれの場所や教会で著者はおびただしく人々に出会ひ、牧師らしからぬ牧師として生きてきた。

横井時雄の伝道地であった今治の生家をめぐる描写や、留学から帰って数年間牧師を務めた倉敷の思い出などは地方都市におけるキリスト教文化の貴重な証言ともいえる内容であろう。また、両親の出会いの舞台となったエラン・ヴィターレについての記述はそのまま同志社演劇小史の一頁をな

すものといえるかもしれない。リーダーとして活躍した福井地震の救援活動などは、戦後同志社の自由なキリスト教の一断面ともいえる。

圧巻は、軍隊生活であろうか。レイテ会戦からよく生還できたものだ。それとも氏の初恋だろうか。年上の女性へのひたむきな少年の恋心は、読む者の頬をさえ紅く染める。それとも七十年代の混乱した状況の中で日本基督教団総会議長の責を負ったくだりだろうか。戦後のキリスト教ブームが去り、日本のキリスト教が自らの神学を求めはじめた時代だった。喜びながら、苦悩しながら、振幅ひろく人生を生きてきた人だと思う。だから、その局面だけで出会った人には、牧師としての氏の姿は見えにくい。しかし、氏は神学部を卒業してからその留学中も含めて一貫して牧師として歩んで来た。氏をとおしてどれほどの人の人生が互いに交錯していることか。

十年ほど昔、氏の書齋で一枚のセピア色に変色した写真を見せてもらったことがある。小さな蜜柑箱の棺に納まった長男望さんの遺影だった。一歳になったばかりだ

つたと聞かされた。このとき氏は、「しかし、目に見える望みは望みではない」（ロマ書八・二四）の意味を人生の体験として獲得したのでろう。夫婦は幼子の手を握って、泣きながら祈ったという。

表題はパツハのコラール「人よ、汝が罪の大きいなるを嘆け」を意識したものだ。氏は、この曲にたくさんある装飾音符のような人生を生きてきたと述懐されるのだが、どうして確かな主旋律が聞こえている。

中村信博（女子大学助教授）

末光力作者

『若草萌えて』

——同志社生活の中から——

表題の『若草萌えて』は同志社ラグビー部の部歌でありさらに著者の従兄の作詞であるとの事、著者の同志社ラグビーへの情熱を思うとき、著者にとってこの表題は身近なものと感じられたのではなからうか。

著者の末光力作氏は大学工学部教授を今年三月をもって定年退職された方である。本書の目的は、この機会に、著者の指導され

た有機化学研究室の卒業生諸氏に、今一度同志社人としての喜びと新島先生の理想を語っておきたいと、三十四年間の同志社生活を通して著者が活字として公表された文章を整理選択し、以下のような内容で一冊の本とされたものである。

一、末光家と同志社…四国伊予の伯父さんが、友人達と東京へでて勉強する途中で京都の新島先生と出会い「これからの青年はすべからく目を世界に向けよ」という新島先生の激励に感動し、東京へ出て勉強する予定を変更し同志社で勉強するようになられたのが、最初である。その後著者のお父さんも同志社女子部へ赴任され、そこから始まる末光家と同志社との関わりが示されている。

二、新島研究より…著者は新島研究会の副会長でもあり「新島研究」誌の編集委員としても活躍されており、ここに取り上げられたものは、巻頭言を含め、その新島研究の一端が示されている。新島襄先生とクラーク博士を中心とした色々なエピソードが面白い。

三、チャペルアワーで語ったものの中から

ら…自然科学者とクリスチャンとしての著者がそこに示されている。

四、同志社ハリス理化学校関係…ハリス氏の寄付によりスタートした理化学校の歴史、内容、新島先生との関連、そしてその卒業生について書かれており、工学部関係者には是非一読を薦めたい内容である。

五、随想…

六、同志社ラグビーと私…日本のラグビーの歴史から始まり、いかにラグビーを応援されたかが伝わってくる。

ゼミ学生が研究室に配属され、卒業していくまでの間、おりにふれ、同志社の歴史、創立者の理想を語り継いで来られた先生。

そして、あながきにてご自身を同志社貴族と称し、生まれながら同志社との関わりをもたれた先生にしてはじめて、退職に際し、卒業生におくる書を刊行できたものと思う。著書中に似顔絵のイラストが所々挿入されているが、表紙の絵と共にお嬢さんの手によるとの事である。面白く、一気に読み終えてしまった。

大鉢 忠 (工学工学部教授)

